



「『ヒーローが好きなんだ。悪を倒す、正義の味方が！』そう語っている子供は多いように思う。」刑務所の中で男はそんな風に言った自分を思い出していた。

子供たちは嬉しそうに、たき火のそばに集まり、おいしく焼きあがる焼き芋を口にする。

「おいしい！」そう言われるたびにおじいさんは「たくさんお食べ」と言って、うれしそうに顔を崩した。子供たちは夢中で食べている。こんなにおいしい焼き芋は初めてだ。

次の日も集まった子供たちは焼き芋を食べに、たき火の周りに集まった。まだ火をおこしていないので、少々寒かった。

十分もすると、おじいさんがやってきてたき火を作った。おじいさんは落ち葉の上に袋に入った薪らしいものを袋のまま火の中に入れた。「これを入れるとよく燃えるじゃろう？」子供たちの前で、たき火はごうごうとうなって、大きな火の山になる。恐怖を感じる子、燃え盛る火にうっとり見入る、ただ茫然と見ている子…そうしているうちに、おじいさんは嬉しそうにニコニコ笑って、子供たちを見ていた。

焼き芋が焼きがると、子供たちは夢中で食べる。おいしいということが表情から伝わってくる。きらきら輝く瞳は、炎の明かりでより輝いて見えた。おじいさんの目もきらりと光っていた。

子供がいなくなる事件が多発したのは、この時期のことだ。公園に遊びにでかけた子供が帰ってこない、とたくさんの捜索願がだされた。警察は徹底的に公園を調べ上げた。そして、ある日、公園の裏の土手でたき火をしているホームレスの男性に出会った。警察は、ホームレスの男性に子供たちの失踪事件のことを聞いた。答えは「わからない」。外見から判断する限り、相当やせ細っていて、とても力があるとは思えなかった。それに、見るからに人のよさそうな外見と物腰に、疑いの気持ちが薄れていた。しかし、その男性に疑いの目を向けるものがいた。歳は10歳。仲良しの弟がいなくなって以来、公園を毎日探している男の子だ。

男の子は弟を探しに公園に行ったとき、たまたまあるものを見つけていた。弟にあげた、レアのカードだ。このカードはやすやすと手に入るものではない。しかし、大好きな弟がいいなとうらやましそうな顔をしたので、苦渋の決断だったが、弟にあげた。「大事にしろよ！」「うん！！」弟の喜ぶ顔を見て、男の子は嬉しかったし、弟もそれを大事にしていた。それが、公園に落ちていた。弟に何かあったのかもしれない。男の子は泣きながら、毎日公園に通っていたのだ。

そして、その男の子にも、弟がいなくなったわけがわかる日が来た。男の子がいつものように弟を探していると、子供たちがあのホームレスの周りに集まっているのを見た。そして、たき火が見えた。その中に投げ込まれる袋…子供たち側からは見えなかつただろう。しかし、男の子側からははっきりと見えた。それは、子供のもみじのような小さな手だった。

恐怖に駆られた男の子は声をあげそうになった。子供たちはおいしそうに焼き芋を食べている。そして、次々に倒れていく。男はその一人一人を大事に袋に詰めていく。男の弱弱しいからだからは想像もできないくらい、強い力で、子供たちを捻じ曲げていく。

男はただのホームレスなどではない。凶悪な殺人鬼なのだ。子供を殺しては燃やして食べることに楽しみを見出した、化け物なのだ。

次の日、またその男の周りには子供たちが集まっていた。そして、火をおこし、子供たちに毒入りの焼き芋を配った。子供たちはおいしそうに食べ、男はニコニコしていた。

倒れる子供たち。笑顔のまま倒れる子供たち。男の顔は豹変し、気味の悪い笑いが浮かんでいた。

「今日も旨そうなガキが手に入った。」

しかし、男は子供たちを食べることで頭がいっぱいになって、後ろに一人焼き芋を食べなかった子供がいることに気が付かなかった。

押される背中。たき火に倒れこむ男。そして、耳をつんざく悲鳴。男は火だるまになって、公園の方へ走っていった、響く悲鳴。転げまわる男。火はなかなか消えない。そして、男の息の根がとまるまで、火は燃え続けた。

男の子はぼつんとたっていた。弟のカードをぎゅっと握りしめ、そして、笑った。

「出てこいよ。あいつ、死んだぜ。」

「あ、ほんとだ。」

言ったのは弟の方だった。弟は生きていた。弟がいなくなったなどという話は真っ赤なウソなのだ。

兄弟はお互いのこぶしにこぶしをあてた。

二人は初めからこの男が子供を食べて生きていることを知っていた。そして、目を付けていた。

この街では二つの事件が多発していた。子供たちの失踪事件と、悪人と呼ばれる男の殺人事件。兄弟は笑い転げながら、男のことを話していた。

「楽しいな、悪人をやっつけるって。」

「だって俺たち、ヒーローだもんな。」

「大人はなぜ、こんな男でも生き延ばそうとするんだろうな。」

「だよなあ。悪人は自分の罪を自らの命で償ってほしいよな。」

「でもさ、」

「なんだよ。」

「悪人を殺してきたけどさ、俺たちも人、殺してるよな。」

「だから？」

「なんだかんだ、俺たちも悪人なんじゃないか？」

「そう。でも、なんたって俺たち、まだ“子供”だから。やっていいことと悪いこと、わかんない。それに、相手は悪人だぜ？ヒーローはばんばん悪い奴、殺してるだろ？」

数年後、兄弟は殺人の罪で捕まった。容疑は父親とその愛人の殺害。父親の浮気を見つけて、二人で父親とその愛人を殺した。どうしても許せなかったのだ。ヒーローにあこがれ続けた、二人の正義感が。

別々の独房の中で兄弟は思っていた。

「やっぱり、俺たちも悪人だったのかなあ。」

独房の窓か見える空の飛行雲を見つめた。そして、舌を思い切り噛んだ。